

2013年2月17日・神奈川新聞「かながわの本」欄では

土の香のハードボイルド

佐々木賢二 著『宮澤賢治の五輪峠——文語詩稿五十篇を読み解く』

「そのときに酒代つくと、夫^{つま}はまた裾野に出でし。そのときに重瞳^めの妻は、はやくまた闇を奔りし」。万葉集の東歌にある一編…というのは悪いおふざけで、実は賢治の作である。夫は馬泥棒に出かけ、その留守に妻は闇夜のなか情人のもとへはしる。古語詩はどうかすると千年の径間を感じさせない。

宮澤賢治という詩人は法華経に帰依し、菜食をもっぱらにしたとされるが、詩作をみると生臭いばかりか、^{せいろ}凄涼あたりを^{おと}圧する。たとえば、「こぞりてひとを^{おと}貶しつゝ、わかれうたげもすさまじき、おのれこよひは暴れんぞと、青き瓶袴を惜しげなく、^{おと}靱緑金に生えそめし、代にひたりて田螺ひろへり」。退職技手の送別会は、そこにいないエライ連中の悪口悪態で盛り上がった。会がはねた後、技手は制服のズボンのまんま田んぼをはい回ってタニシを拾う。

賢治自身の感想は一切ない。古語の重層に身を潜ませて情景を淡々と描き、上に立つ俗物たちに冷眼を注ぐ。土の匂いのするハードボイルドである。下書き稿を掘り起こし、手紙類で補い、対照する口語詩を併せて理解を助ける。精緻な論考だ。裏付け作業はさぞホネが折れたことだろう。

著者は横浜市港北区で内科小児科医院を営む。

と紹介されています。